

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02853

研究課題名（和文）留学生と日本人学生の協働を活かした言語学習活動デザインのための基礎研究

研究課題名（英文）A Basic Study for the Design of Language Learning Group Work Activity between international and Japanese students

研究代表者

山田 明子（YAMADA, AKIKO）

九州大学・工学研究院・助教

研究者番号：30600613

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、留学生と日本人学生による協働学習活動の基盤となる、対話を成立させるコミュニケーションがどのように行われているのか、実際のグループワークをデータとして、その実態を会話分析の手法を用いて明らかにした。その結果、「アイデア提示」の後の位置で理解確認のやり取りが生じていること、日本語L2話者の発話をL1話者がグループワークという文脈に積極的に意味づけることによりL2話者の参加が可能となっていること、日本語・英語両使用場面で参加者の言語レベルに関わらず「単語発話のくりかえし」が見られたこと等が、分析結果として得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、留学生と日本人学生によるグループワークの相互行為の実態を、参加者の視点から微視的に捉えた。微視的なアプローチを採った分析を行ったため、グループワーク設計のための体系的な結果を示すことまではできなかったが、最終的に協働学習活動の指導の参考になるポイントを示すことができた。本研究の成果は、大学の国際化に伴う国際共修や多文化間共修の実践場面に還元できるものである点、また、臨床的に教育実践を分析する方法として会話分析という手法の可能性を示せた点において、社会的・学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated conversational interactions in the process of goal-setting task activities in groups consisting of international and Japanese students, focusing on how they build mutual understandings and correct misunderstandings through their talk. Using the framework of conversation analysis (CA), which captures the orientation of participants, we have found that (1) understanding check occurs in the turn after someone's statement of opinion, (2) Japanese L1 speakers made sense of L2 speaker's ambiguous utterance making relevant to the context of goal-setting task, thereby L2 speakers could get chances to take turns in interaction, (3) participants interacted cooperatively to show understanding/non-understanding using "one-word utterance as response" in both Japanese and English tasks regardless of participants' linguistic ability, etc.

研究分野：日本語教育

キーワード：異文化間コミュニケーション 相互行為能力 会話分析 日本語教育 言語教育

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化や大学の国際化に伴い、主に異文化コミュニケーションや日本語教育の分野において、留学生と日本人学生が対等な立場で共に学び合う授業活動が実施されてきている。これらの授業では、学生同士の相互理解を深めると同時に言語コミュニケーション力の育成が目指されており、英語・日本語を使用言語としたディスカッションやグループプロジェクトなど学習者主体の授業活動が行われている。しかし、このような協働学習活動の実践・研究には、以下の課題がある。

- (1) 留学生と日本人学生の接触自体に重点が置かれ、学習目的や学習項目、指導のポイントが不明確である(杉原 2010)。
- (2) 留学生と日本人学生の協働学習活動に関する先行研究では、授業実践者や参加者の内省をもとにした分析が多く(坪田・野沢 2004, 中島 2014, 池谷 2016 など)、実際に参加者同士のやり取りにおいて何が行われているのかを分析した研究は、まだ多くはない(岩田 2007, 田崎 2009 など)。

つまり、協働学習活動では対話を通して参加者同士の学びを促進することが目指されるが(倉八 2001, 池田・館岡 2007 など)、協働学習活動をデザインするための基礎データとして、学びが起きる対話とはどのような対話なのか、対話を成立させるためにはどのようなコミュニケーションスキルが必要なのか、そして、対話プロセスにおいて参加者同士は実際にどのようなインタラクションを作り上げているのか、といった実証的な研究が不足していると言える。

また、先行研究においては、母語話者・非母語話者であるという関係性(森本 2001, 杉原 2010 など)や、コードスイッチングによる相手言語接触場面から第三者接触場面への転換(田崎 2007)など、使用言語がインタラクションに影響を与えることが指摘されている。しかし、まだ研究の蓄積が少なく、使用言語が協働学習活動のコミュニケーションにどのような影響を与えるかという観点からの研究は管見の限りない。

以上より、留学生と日本人学生による協働学習活動を設計する上で、協働学習活動のプロセスの実態に即したデータや指導方法がまだ十分でないという現状があると言える。

### 2. 研究の目的

本研究では、協働学習活動の基盤となる、対話を成立・促進させるコミュニケーション力の育成に焦点を当てた指導モデルの提案を目指し、活動中の対話を促す・滞らせるインタラクションの特徴を、主に日本語使用場面を中心に明らかにすることを旨とする。また、同じメンバーによる協働学習活動について、日本語使用場面と英語使用場面の2つの言語使用場面をデータとし、使用言語が与える影響があるかも探ることを試みる。

具体的な研究課題は、下記の通りである。

- 研究課題1：対話を停滞させるインタラクションの解明  
対話が停滞し、スムーズに進んでいない場面を抽出し、言語・非言語情報をもとに、その場面の構造および原因を解明する。
- 研究課題2：対話のトラブルや停滞を解消させるインタラクションの解明  
コミュニケーション上のトラブルやL2話者の言語力不足による対話の停滞が生じている場面を抽出し、その停滞がどのように解消されているのか、言語・非言語情報をもとに、その場面の構造を解明する。
- 研究課題3：使用言語とインタラクションの関係性の解明  
使用言語に関わらず生じるインタラクション、使用言語により異なるインタラクションの特徴を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究手法

本研究では、協働学習活動における学生同士のインタラクションを分析するための手法として、会話分析の手法を用いる。会話分析では、会話を参与者同士が間主観的に構築するものとして捉え、研究者の外的視点から会話を切り取っていくのではなく、会話の参与者の視点からその場の参与者の志向に寄り添いつつ、会話における発話・行為の意味を、微視的に文脈を踏まえながら解釈していくというアプローチを採る(前田他 2007)。

これまで、留学生と日本人学生のコミュニケーションプロセスは、研究者の外的視点から発話のコーディングや意味付けが行われてきたが、会話分析の手法を用いることにより、参与者の視点からコミュニケーションプロセスの成立を記述することが可能となる。また、会話分析を用いることにより、本研究のデータである、留学生と日本人学生によるグループワークという文脈を捉えたコミュニケーションプロセスの分析も可能となる。本研究では、あくまで参与者の視点に立ち、参与者の関係性や文脈までを捉えたコミュニケーションの実態を明らかにする。

#### (2) データの概要

低年次必修科目である日本語科目（研究代表者担当；英語で学士の学位が取得できるコースの留学生）と英語科目（研究分担者担当）の合同授業を開講し、日本語・英語を使用言語とした話し合い活動を録音・録画し、データとして用いた。また、それ以外に、工学系大学院生を対象としたビジネス日本語クラスにおいて、日本語を使用言語とした留学生と日本人学生による話し合い活動を特別セッションとして実施したものも、データとしている。いずれのデータでも、グループは、留学生・日本人学生から成る3名1組編成であり、留学生と日本人学生は初対面である。言語能力については、いずれのデータでも、日本語力は日本人学生が母語話者、留学生が初中級～中上級レベルである。英語使用場面は学部生を対象にしたグループにしか実施しなかったが、留学生はプレゼンテーションやレポート作成等ができるレベル、日本人学生の運用力にはかなりのレベル差があった。課題の内容は、「訪日外国人観光客数増加のための提案提示」「この大学に学生を呼び込むための方法提案」等、1つのテーマを教員から与えた上で、「アイディアを出し合う→post-it に書いたアイディアをグルーピングする→1つのアイディアを選択する」という流れで実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究課題1に関わる研究成果

- ①山田(2017, 2019a)では、コミュニケーション上の問題が生じた場面を抽出するとともに、どのようにそのトラブルを解消し、相互理解を構築しているのかを明らかにした。コミュニケーション上の問題を特定するために、会話分析における「他者開始修復」を含む会話連鎖に着目して分析を行った。その結果、下記のことが明らかになった。
  - ・コミュニケーション上の問題がインタラクションの中で顕在化するのには、主に「アイディア提示後」という、聞き手が何らかの応答を行うことが期待される位置であった。このことから、グループワークを遂行するために、提示されたアイディアについて確認することが話し合いを進める上で重要であったことが推測される。
  - ・トラブルの原因としては、音声面から意味内容面まで幅広い要素が含まれており、お互いの反応を見ながらトラブルの原因を何ターンかかけて解消していくという実態が明らかになった。このことから、まず留学生が「聞き返し」を含むコミュニケーション上のトラブルの明示化を行うことが、必ずしも「日本語力不足」の問題として扱われるのではないことが分かる。また、トラブルを1回で解消することが必ずしもよいというわけではなく、お互いの反応を見ながら、何がトラブルの原因であったかを探りつつ相互理解を構築しているというコミュニケーションの実態が明らかになった。
- ②山田(未公開)では、初中級レベルの留学生自身が、事後インタビューで「言いたいことを伝えられなかった」と指摘した場面を抽出し、なぜ「言いたいことが伝えられなかったのか」、その原因を会話分析の手法を用いて明らかにした。その結果、以下の2点が分かった。
  - ・日本人学生の話の先を読んだ協調的な発話が、留学生が自分自身の発話順番を確保し、言いたいことを最後まで言い終わるまでの環境を閉ざしていた。
  - ・日本人学生が留学生の発話をグループワークの課題達成のためのアイディアとして意味づけてしまうことにより、会話の流れが課題達成に向けて進展していき、留学生が自分自身が言いたかったことを再度言い直す機会を失っていた。

##### (2) 研究課題2に関わる研究成果

- ①山田(2019a)では、①の通りコミュニケーション上の問題の生起に関わるインタラクションの分析を行ったが、それと同時に、「他者開始修復」を含む会話連鎖から、相互理解を確保・構築するために、参加者がどのような工夫を行っているかも明らかになった。
  - ・トライマーク（発話者自らが、今言い表している対象物を相手が認知できるかどうか、自分の発話の順番内で少し間を置き、確かめること）を使用して、言語力の低い者に対して他者開始修復を行うスペースを創出していることが分かった。
  - ・3人会話では、修復の問題源を含む発話を産出した者でも修復を開始した者でもなく、コミュニケーション上の問題を認識したもう一人の参加者が修復に参加し、相互理解を構築するために一役買っていることが分かった。
- ②山田(2018)では、初中級レベルの日本語力を持つ留学生(L2話者)が、限られた言語力を活用しながら、どのようにして日本語を使用言語とするグループワークに参加しているのか、「意見・アイディア提示」の達成に着目し、その実態を明らかにした。その結果、以下のことが明らかになった。
  - ・L2話者が自分の意見・アイディアを述べる際に発話の滞りが生じた時、L1話者はL2話者の発話順番を奪わないようなやり方で、L2話者の「意見・アイディア提示」をサポートしている。
  - ・L2話者の発話が形式上「意見・アイディア提示」であると分かりにくい場合でも、L1話者がその発話を「意見・アイディア提示」として話し合い活動に取り込むことにより、L2話者がグループワークに参加する場が作られていた。
- ③山田(2020)では、2組のグループワークを比較し、なぜ一方の組ではグループワークが

うまくいっていなかったのか、その原因を 2 組のグループに共通の会話連鎖の構造（日本人学生が留学生の知識・経験を問う質問から開始する、「質問－応答」連鎖）をもとに探った。その結果、グループワークがうまくいかなかったグループでは、日本人学生の質問の意図が分かりにくく、留学生の質問から得られた情報がグループワークの話し合いにうまく結びついていなかったこと、また、質問に対する留学生の応答に対して「へえ」や「あ、そうなんですか」などの「情報の受け止めや理解」を積極的に示さないことで、留学生の応答が拡張して「質問－応答」の「応答」の部分が理由付けや補足説明で長くなり、結果的に留学生の発話順番が長くなるという傾向が見られた。

### (3) 研究課題 3 に関する研究成果

日本語・英語使用場面に共通の現象として、言語能力・言語レベルに関わらず、「単語発話」によりグループワークを進めていることが分かった。そこで、各言語使用場面における「単語発話」を含むインタラクションに焦点を当て、「単語発話」によって何を達成しているのかを明らかにすることを試みた。

①山田 (2019b) では、post-it のグルーピング場面において「単語発話」が見られたことから、日本語を使用言語とする post-it のグルーピング場面において「単語発話」がインタラクションの中でどのような働きをしているのかを明らかにすることを試みた。本研究では、「単語発話」だけに注目するのではなく、まず post-it のグルーピング自体がどのように達成されているかを分析し、その中で「単語発話」がどのようにインタラクションに埋め込まれているのかを探った。分析の結果、「グループ名のアイディア提示」に対する応答として、「グループ名」をそのまま単語でくりかえすという現象が見られ、以下のことが分かった。

- ・ 応答としての平板イントネーションのくりかえしは、「話し手の態度」が判断しにくいいため、相手にその行為の意味を解釈する余白を与える、とりあえずの「差しさわりのない反応」として解釈される。
- ・ グループメンバーが提示した「グループ名のアイディア提示」に対して、「抵抗」を示す最初の応答として「提示されたグループ名（単語発話）のくりかえし」が行われていた。

②横森 (2019) では、英語を使用したグループワーク場面において、参加者が産出する「断片的」発話における発話デザインの違いおよびそれによって調整される認識的スタンスが、相互行為の展開とどう関わり合っているか（言い換えれば、どのような位置でどのようなデザインが利用されるか）という問いに取り組んだ。特に、相手発話の一部を、下降音調で笑いを伴わずに繰り返して反応を示すタイプの「断片的」発話に焦点をあて、「Oh」などの認識変化詞を伴うものと認識変化詞を伴わないものを比較した。データ分析の結果、認識変化詞を伴う名詞句繰り返し発話が、理解・同意を明確に伝え相互行為を先に進めるのに対し、認識変化詞を伴わない名詞句繰り返し発話は「その語句は聞き取ったが理解に問題がある」というスタンスを示し、それによって相手からの説明を呼び込むことができるという相違があることが観察された。外国語学習・外国語教育の文脈において、非母語話者の発話が統語的に完結した文にならず、「断片的」になること（典型的には単語だけで発話すること）を問題視する言説がしばしば見られるが、実際の相互行為を観察すると、「断片的」発話は必ずしも単に当該言語の習熟度の低さを示す発話として捉えるべきではなく、非母語話者たちの相互行為能力を例示する現象である可能性を論じた。

③陳 (2019) では、日本人学生が直前の留学生の発話における 1 単語を下降調で繰り返すことによって開始される連鎖に焦点を当てており、その繰り返しが留学生がどのように認識するのか、また、言語的非対称性 (linguistic asymmetry) がその発話の認識とどのように関連づけられるのかを明らかにすることを試みた。1 単語発話の繰り返しが出現する位置によって、「情報要求の直後の位置」、「情報提供の直後の位置」、「質問－応答連鎖の直後の位置」に分けて分析を行った。分析の結果、以下の知見を得た。(1) 三つの連鎖位置における 1 単語の繰り返しが他者修復開始として認識されることがわかった。(2) 修復実行の連鎖から見れば、留学生が日本人学生による 1 単語の繰り返しがまず聞き取りの問題であったものとして扱い、日本人学生が言語知識の欠如を明らかに示してから初めてそれを理解の問題として扱う傾向が見られた。(3) 言語的非対称性は、行為を認識するために利用可能なリソースであることが示唆された。(4) 修復連鎖が完了した後、日本人学生が最初にトラブルになった 1 単語をまた繰り返したり、他の文脈で使ったりする現象から、1 単語の繰り返しによる修復開始は、言語学習のプロセスの一環である可能性が示唆された。

以上、本研究では、会話分析の手法を用いることで、留学生と日本人学生のグループワークがどのように成立しているのかを、参加者自身の視点にもとづき微視的に明らかにした。最終的に、留学生と日本人学生の協働学習活動を成立させるためのコミュニケーション力育成に関する指導モデル提案という形にまで、研究結果をまとめ上げることはできなかったが、協働学習活動におけるコミュニケーション力育成のための指導のポイントとして、下記のことを提案する。

- ・活動の目的を明確に参加者に示し、理解・共有させておくことにより、活動という大きな文脈の中で発話が意味づけられていくため、初中級レベルのL2話者もグループワークへの参加が可能になる。しかし、L1話者がL2話者の発話を先取りし、L2話者の発話を活動の文脈に意味づけてしまう場合、L2話者が言いたかったことがきちんと伝わらない状況も生まれる可能性がある。
- ・グループワークにおけるコミュニケーションの成立には、参与者個人個人の認知的な言語能力だけでなく、相手の発話をいかに解釈するかという状況の解釈能力や自分の行為の提示能力も求められる。したがって、グループワークの基盤となるコミュニケーションが円滑に進んでいくためには、L2話者に対する言語能力の指導だけでなく、L1話者に対する「コミュニケーション能力」の指導、また、グループワークという活動自体を成立させるコミュニケーションの取り方の指導も必要であると言える。
- ・本研究から、グループワークの中でL1話者・L2話者の双方が、単語発話を産出していることが分かった。「単語発話の産出やくりかえし」は、複雑さがない不十分な発話であると思われがちであるが、逆にそれが自分のスタンスを明示化しないという点で、コミュニケーションを円滑に進めているケースがある。したがって、言語形式に焦点を当てた指導を行う場合には、完全な言語形式を求める必要性があるかどうかを指導の際に見極める必要があるだろう。
- ・本研究の分析を通して分かったことは、メンバーや状況によってコミュニケーションの問題が多様だということである。したがって、会話分析の研究観点をを用いて、学習者自身が自分たちのグループのコミュニケーションを見直すというような振り返りの時間を取ることににより、参与者自身が作り出した文脈に沿って、自分たちのコミュニケーションの問題点やコツに気づくという、会話の状況の多様性に対応した指導が可能になるのではないかと思われる。

【参考文献（研究代表者および研究代表者、研究協力者の研究を除く）】

- ・池田玲子、館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門－創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房。
- ・池谷知子（2016）「留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義」神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部篇 5, pp. 55-70.
- ・岩田夏穂（2007）「留学生と日本人学生の自由会話に見られる参加の対称性と非対称性」言語文化と日本語教育 33, pp. 1-10.
- ・倉八順子（2001）『多文化共生にひらく対話－その心理学的プロセス』明石書店。
- ・杉原由美（2010）『日本語学習のエスノメソドロジー 言語的共生化の過程分析』勁草書房。
- ・田崎敦子（2007）「接触場面のコードスイッチングが参与者に与える影響：多言語を背景にした大学院生のグループディスカッションを対象に」異文化コミュニケーション研究 19, pp. 85-99.
- ・田崎敦子（2009）「英語で研究活動を行う留学生に対する日本語教育の必要性－英語から日本語へのコードスイッチングの働きから－」社会言語科学 12, pp. 80-92.
- ・坪田典子、野沢智子（2004）「クラスを超えた学び合い－留学生日本語クラスと日本人学生英語クラス間交流－」文教大学国際学部紀要 15(1), pp. 117-131.
- ・中島祥子（2014）「多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学び－留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから－」鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編 65, pp. 133-148.
- ・森本郁代（2001）「地域日本語教育の批判的な再検討－ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁（編）『正しさへの問い－批判的社会言語学の試み』三元社, pp. 215-247.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山田明子	4. 巻 -
2. 論文標題 留学生と日本人学生の話し合い活動における相互理解構築プロセスの分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の研究 - 言語学、日本語学、日本語教育学、言語コミュニケーション学からの視座 -	6. 最初と最後の頁 233-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田明子	4. 巻 47
2. 論文標題 グループワークにおける話し合いの進め方の違いを探る - 2つのグループの相互行為分析 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州教育学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田明子	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語L1・L2話者によるグループワークの相互行為分析 - 言いたいことが伝えられなかった会話連鎖 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 （ 語用論に関する論文集，現段階で調整中）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 15
2. 論文標題 リンガ・フランカとしての英語使用場面における断片的発話と認識的スタンスの調整	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語用論学会第22回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田明子
2. 発表標題 グループワークにおける話し合いの進め方の違いを探る - 2つのグループの相互行為分析 -
3. 学会等名 第71回九州教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 リング・フランカとしての英語使用場面における断片的発話と認識的スタンスの調整
3. 学会等名 日本語用論学会第22回年次大会，ワークショップ「英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田明子
2. 発表標題 post it のグルーピング作業 はどのようにして達成されている のか？ - 応答としての「くり返し」に着目して -
3. 学会等名 第2回会話分析研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 陳力
2. 発表標題 One-word repetitions as other-initiations of repair in collaborative learning activities between Japanese students and international students
3. 学会等名 第2回会話分析研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田明子
2. 発表標題 留学生・日本人学生の話し合い活動における意見提示場面の相互行為分析
3. 学会等名 異文化間教育学会 第39回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田明子
2. 発表標題 目標指向型の話し合い活動における日本語非母語話者・母語話者の相互行為- 3人会話における非母語話者による他者開始修復に着目して-
3. 学会等名 2017年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	横森 大輔  (YOKOMORI DAISUKE)  (90723990)	九州大学・言語文化研究院・准教授    (17102)	
研究 協力者	陳 力  (CHEN LI)	北京語言大学東京校・非常勤講師	